令和４年８月4日（木）　講演会「ご家族と支援者のための行動障がいの理解と支援」
（岐阜市障害者総合支援協議会　第３回専門部会）

# 行動障がいの理解と支援

（独）国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
総務企画局　研究部　研究課　　内山　聡至

# 講義の内容

１．国立のぞみの園の紹介

２．行動障がいとは

３．行動障がいがある児者への関わり方の工夫

４．関係者との連携

５．おわりに

# １．国立のぞみの園とは･･･

【沿革】
・昭和46年　国立コロニーのぞみの園
　　開園
・平成15年　独立行政法人化

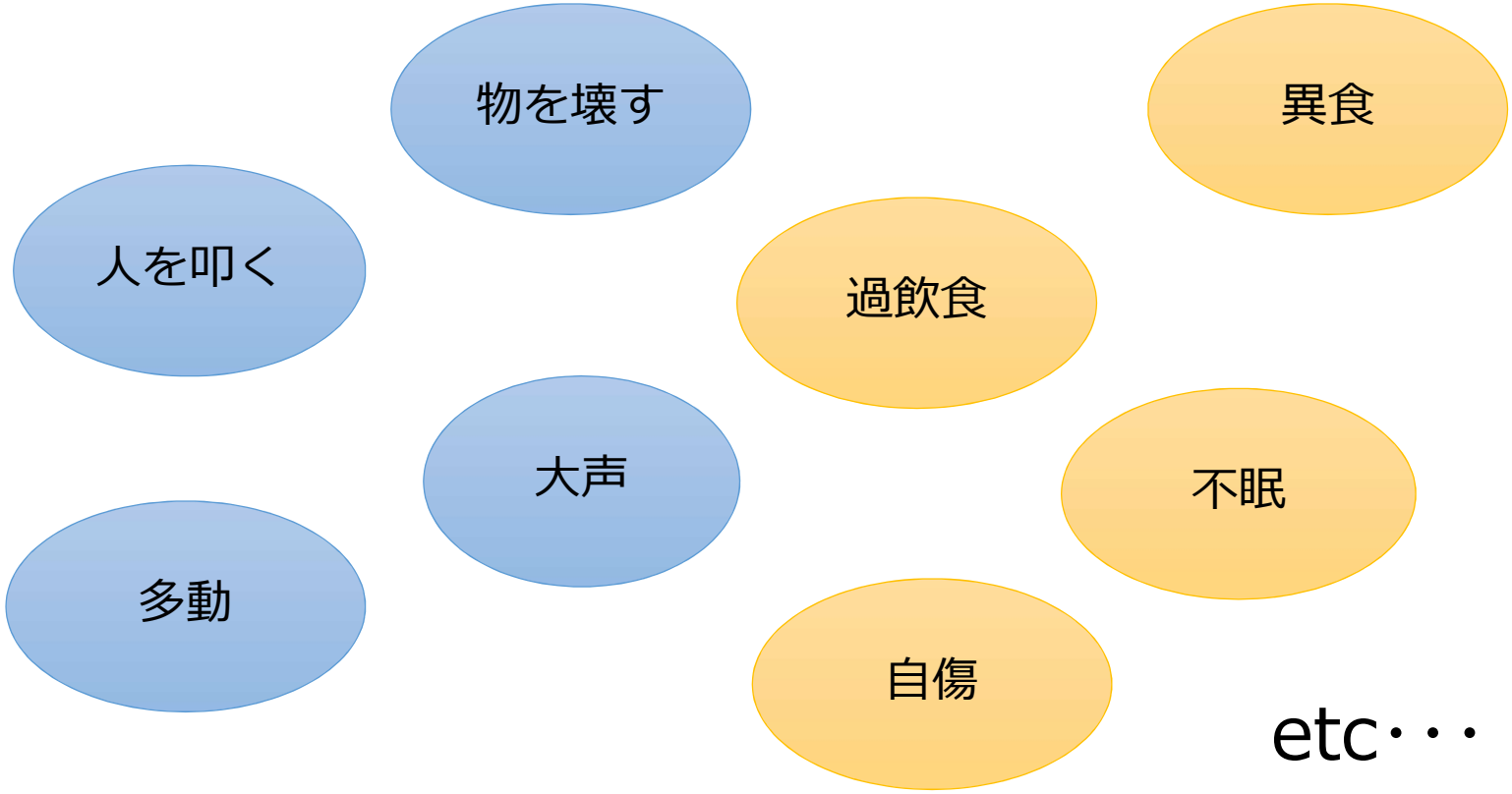
群馬県高崎市を臨む標高200mの丘陵地に位置

【事業概要】

（１）　重度の知的障害者に対する自立のための総合施設の設置・運営
（２）　知的障害者の自立と社会参加に関する調査、研究及び情報提供
（３）　知的障害者の支援業務に従事する者の養成及び研修
（４）　障害者支援施設の求めに応じた援助及び助言
（５）　附帯業務（診療所、グループホーム、児童発達支援センター、放課後等デイサービス　など）

# ２．行動障がいとは

Q：皆さんが思う行動障がいとは、
どのようなものでしょうか？



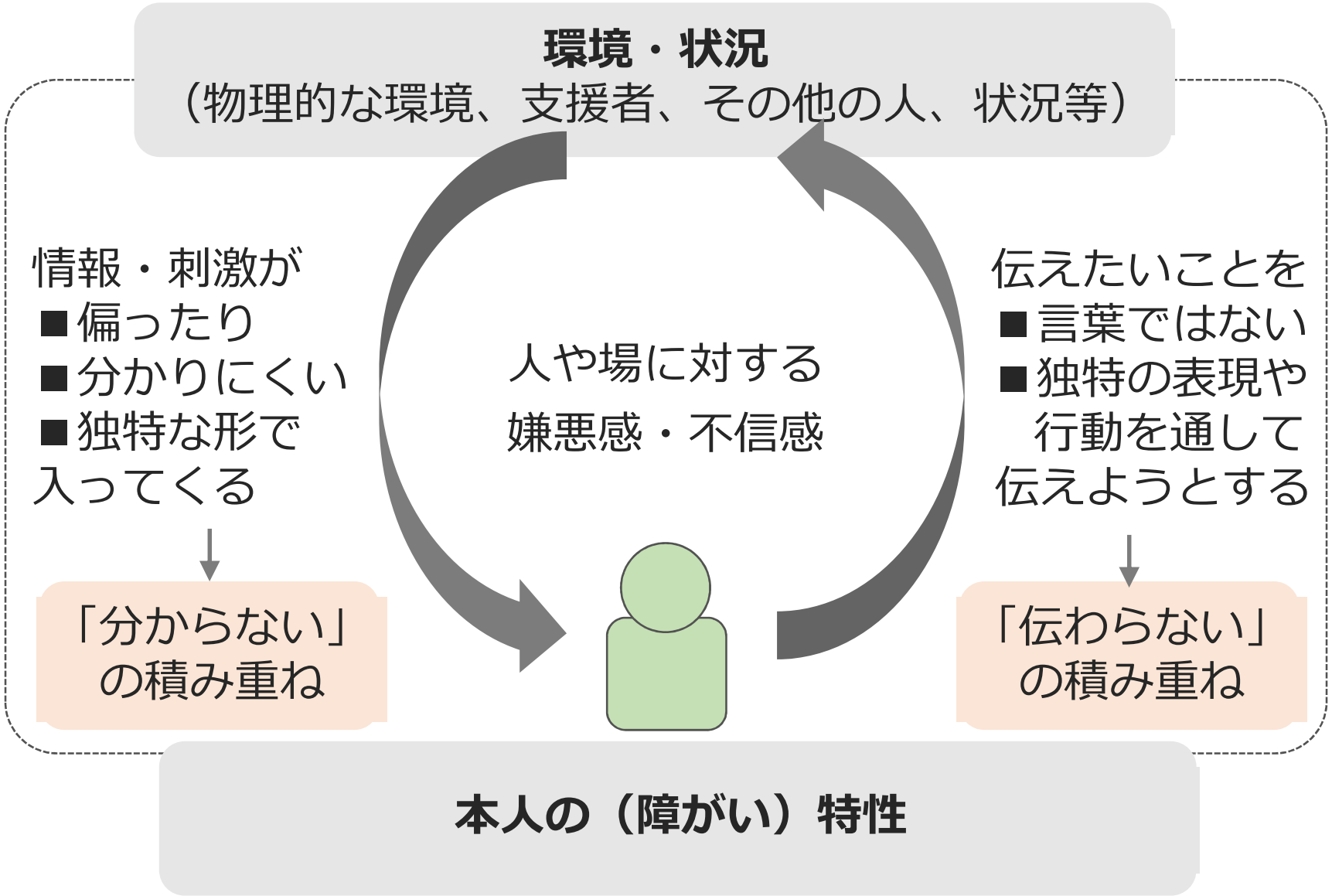
# 強度行動障がいとは

- 自分の体を叩いたり食べられないものを口に入れる、危険につながる飛び出しなど、**本人の健康を損ねる行動**
- 他人を叩いたり物を壊す、大泣きが何時間も続くなど、**周囲の人のくらしに影響を及ぼす行動**

↓

- 上記のような行動が**著しく高い頻度**で起こるため、継続的に**特別に配慮された支援が必要になっている状態**のこと

# 強度行動障がいの要因




**本人の（障がい）特性 × 環境要因 ⇒ 強度行動障がい**

# 問題行動の悪循環

■問題行動の発生・認識

↓

■エピソードや思い込みによる仮説立て

↓

■場当たり的な対応

・言葉による注意や説明、叱責、ほのめかし、約束

・それで収まらないと、対応がどんどんエスカレート

・スパルタor全面的受容or薬の過剰投与

↓

■よりストレスや混乱の高い状況、誤学習

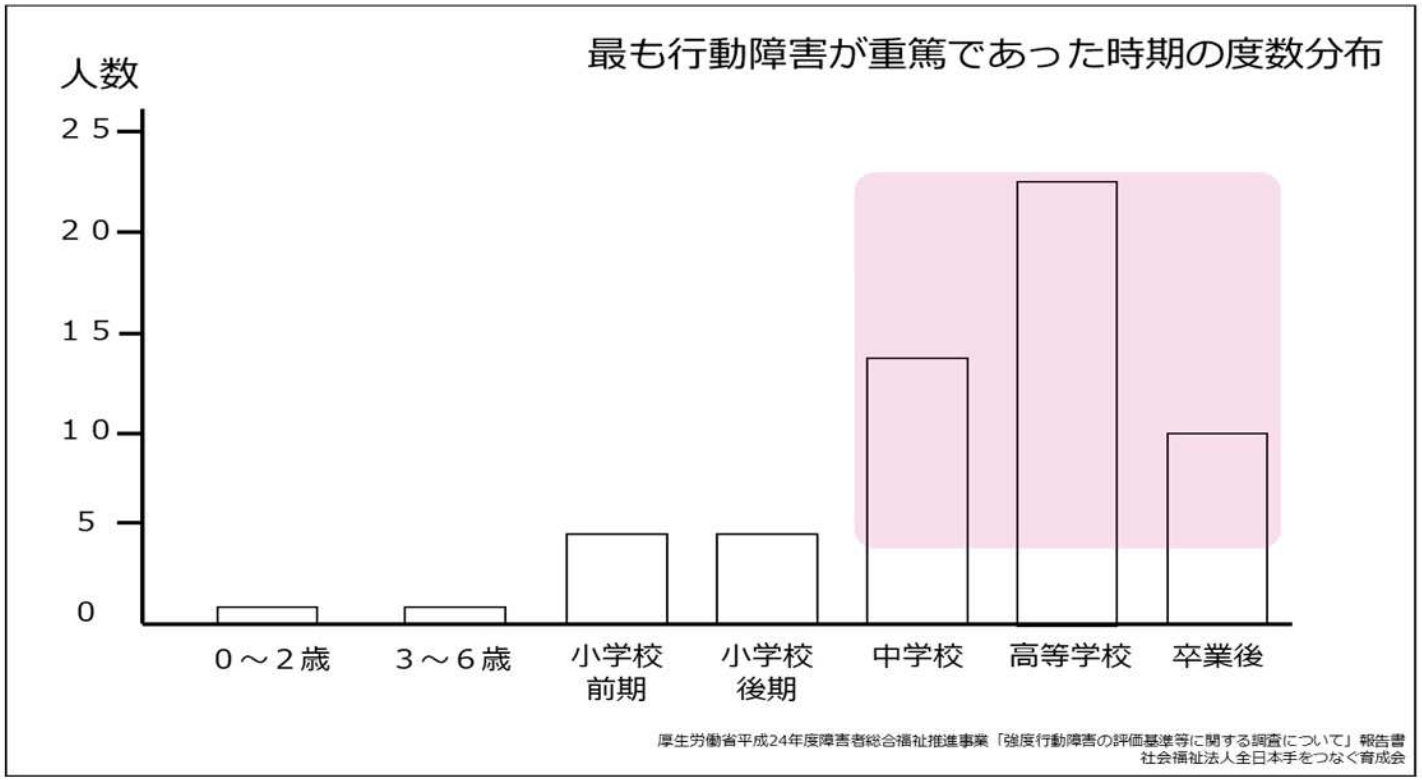
↓

■問題行動の悪化、行動障害の固着化

【文献】自閉症eサービス編（2020）「自閉症スペクトラム症支援のためのレジュメ集2020-2021年度版」p31

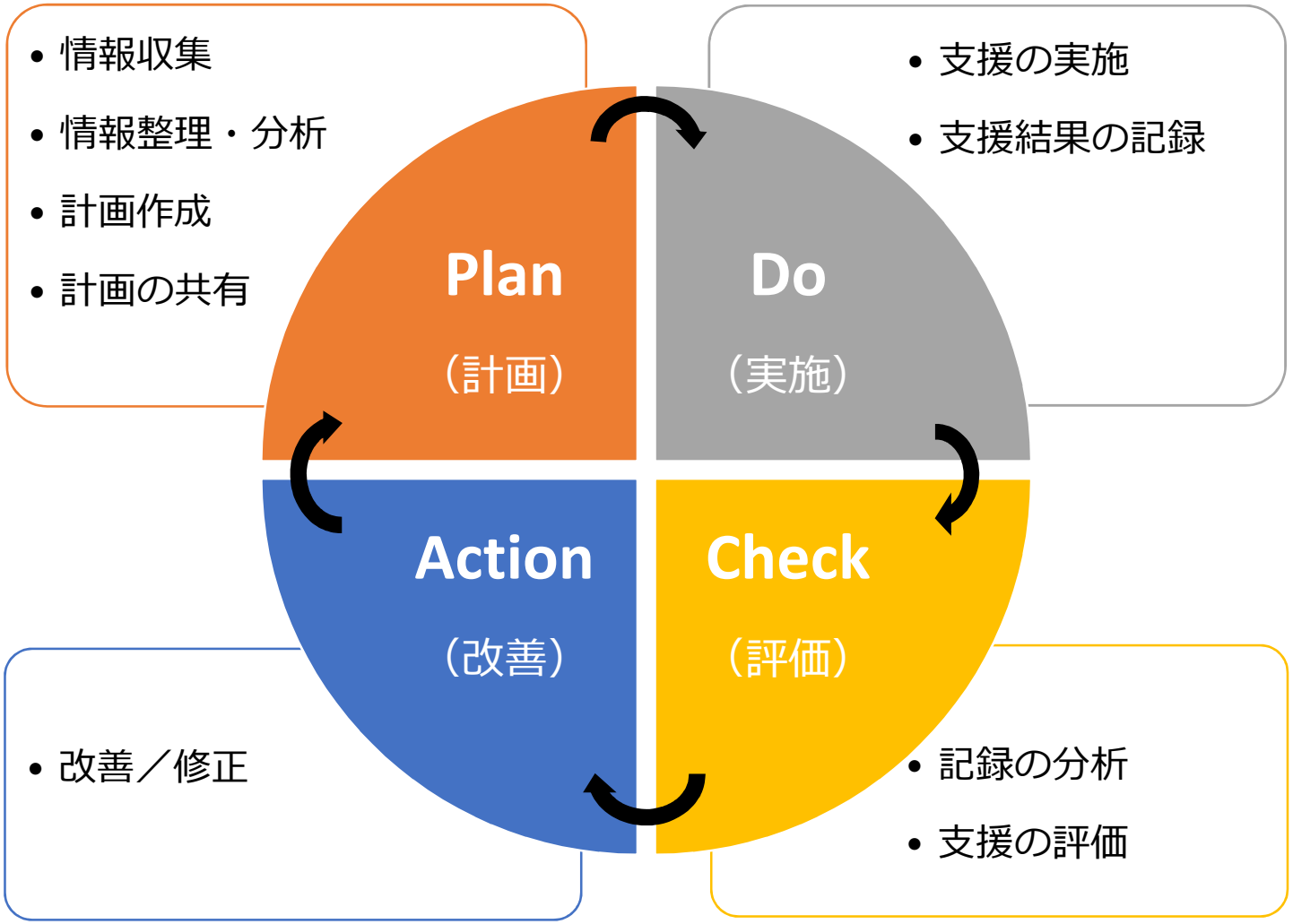
# 強度行動障がいの予防

- 自閉症の障がい特性に配慮した支援（療育・教育）が強度行動障がいの予防の基本
- できるだけ早期に、その子（人）にあったコミュニケーションの方法を習得する必要がある



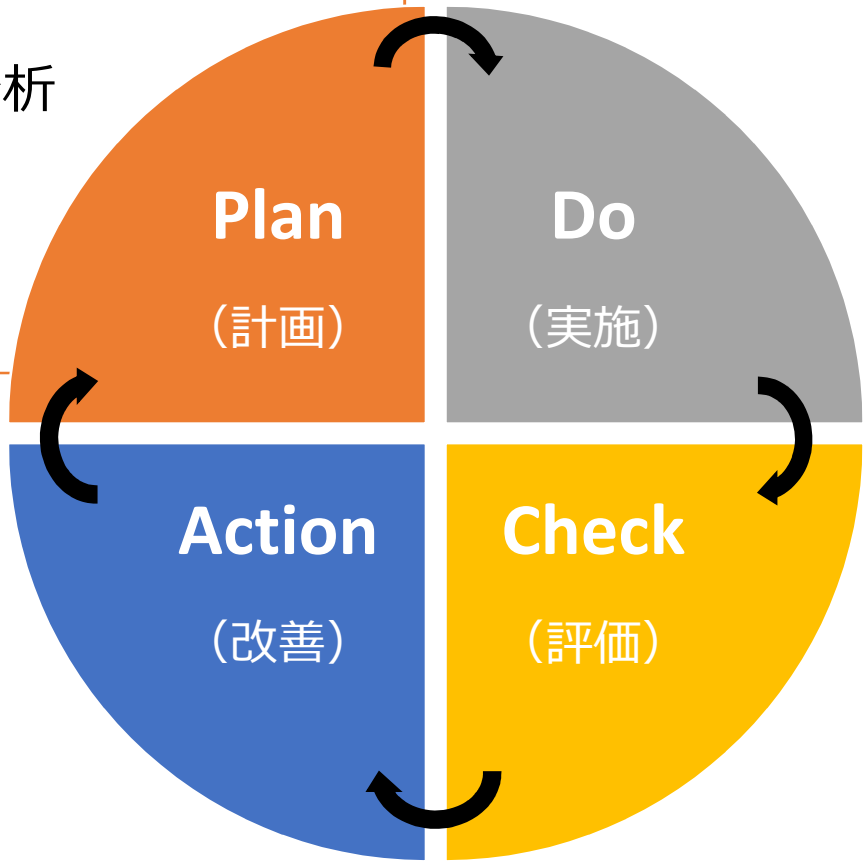
# ３．行動障がいがある児者への関わり方の工夫

# 支援の流れ＝PDCAサイクル



# Step 1　情報収集

- **情報収集**
- 情報整理・分析
- 計画作成
- 計画の共有



# 情報収集＝アセスメント

■できるだけ正確に、対象となる本人のことを知る

・その人の個性を把握する
・活動や学習のスタイルを知る
・興味・関心を知る
・得意なこと・強みを知る

☆特性の理解なくして、正確なアセスメントは
あり得ない

# 自閉症とは

【三つ組】

**社会的相互作用の質的な障がい**

人に対する独特な関わり方

**想像力の障がい**

見通しが持ちにくく急な変更が苦手

**コミュニケーションの質的な障がい**

言葉や表情等の使い方や理解の仕方が独特

【その他】

- 感覚過敏・鈍麻
- 多動
- 睡眠の問題

# 社会性の特性

【人や集団との関わりに難しさがある】

- 相手への関心が薄い
- 相手から期待されていることを理解することが難しい
- 相手が見ているものを見て、相手の考えを察することが難しい

【状況の理解が難しい】

- 周囲で起こっていることへの関心が薄い
- 周囲の様子から期待されていることを理解することが難しい
- 見えないものの理解が難しい

【文献】強度行動障害支援者養成研修基礎研修資料

# コミュニケーションの特性

## 【理解が難しい】

- 話し言葉の理解が難しい
- 一度にたくさんのことを理解するのが難しい
- 抽象的であいまいな表現の理解が難しい

## 【発信が難しい】

- 話し言葉で伝えることが難しい
- どのようにして伝えたらいいか分からない
- 誰に伝えていいか分からない

## 【やりとりが難しい】

- 場面や状況に合わせたコミュニケーションが難しい
- 表情や視線などの非言語コミュニケーションが難しい
- やりとりの量が多いと処理が難しい

【文献】強度行動障害支援者養成研修基礎研修資料

# 想像力の特性

## 【自分で予定を立てることが難しい】

■段取りを適切に組むことが難しい
■なんとなく、だいたいなどのイメージを持ちにくい
■今やることを自分で判断することが難しい

## 【変化への対応が難しい】

■先の予測をすることが難しい
■臨機応変に判断することが難しい
■自分のやり方から抜け出すことが難しい

## 【物の一部に対する強い興味】

■興味・関心が狭くて強い
■細部が気になり違いに敏感
■少しの違いで大きな不安を感じる

【文献】強度行動障害支援者養成研修基礎研修資料

# 感覚の特性

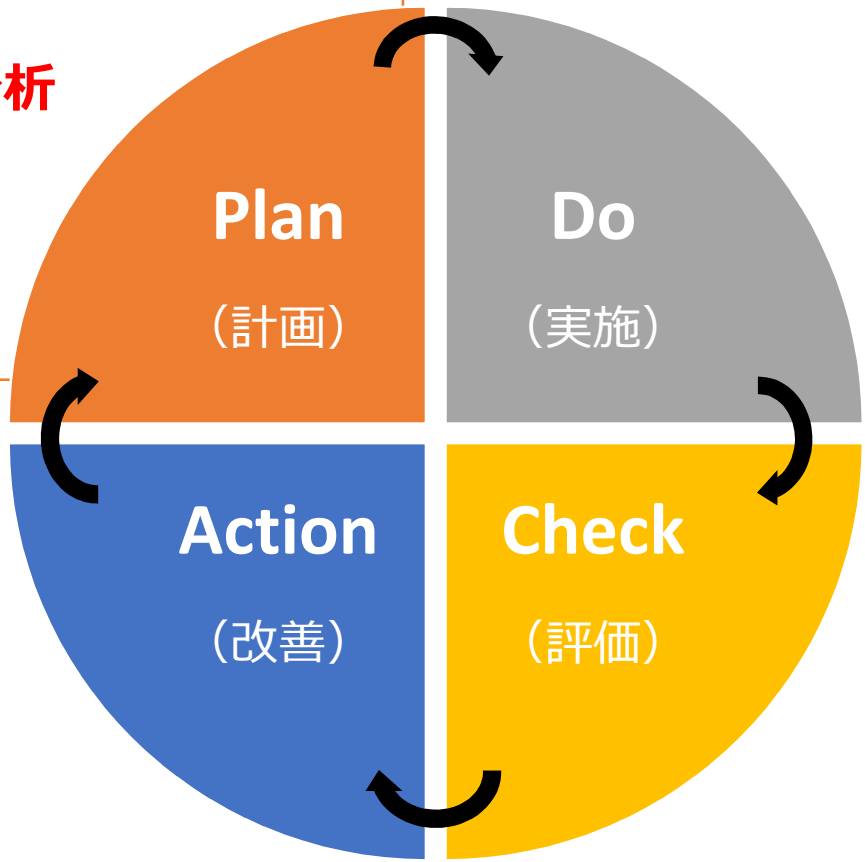
【感覚の偏りがある】

- 聴覚が過敏または鈍感
- 視覚が過敏または鈍感
- 触覚が過敏または鈍感
- 嗅覚が過敏または鈍感
- 味覚が過敏または鈍感
- 前庭覚の特有の感覚がある
  - → 重力や体の傾き、スピード等を感じる感覚
- 固有受容覚の特有の感覚がある
  - → 身体の位置や動き、力の入れ具合を感じる感覚

【文献】強度行動障害支援者養成研修基礎研修資料

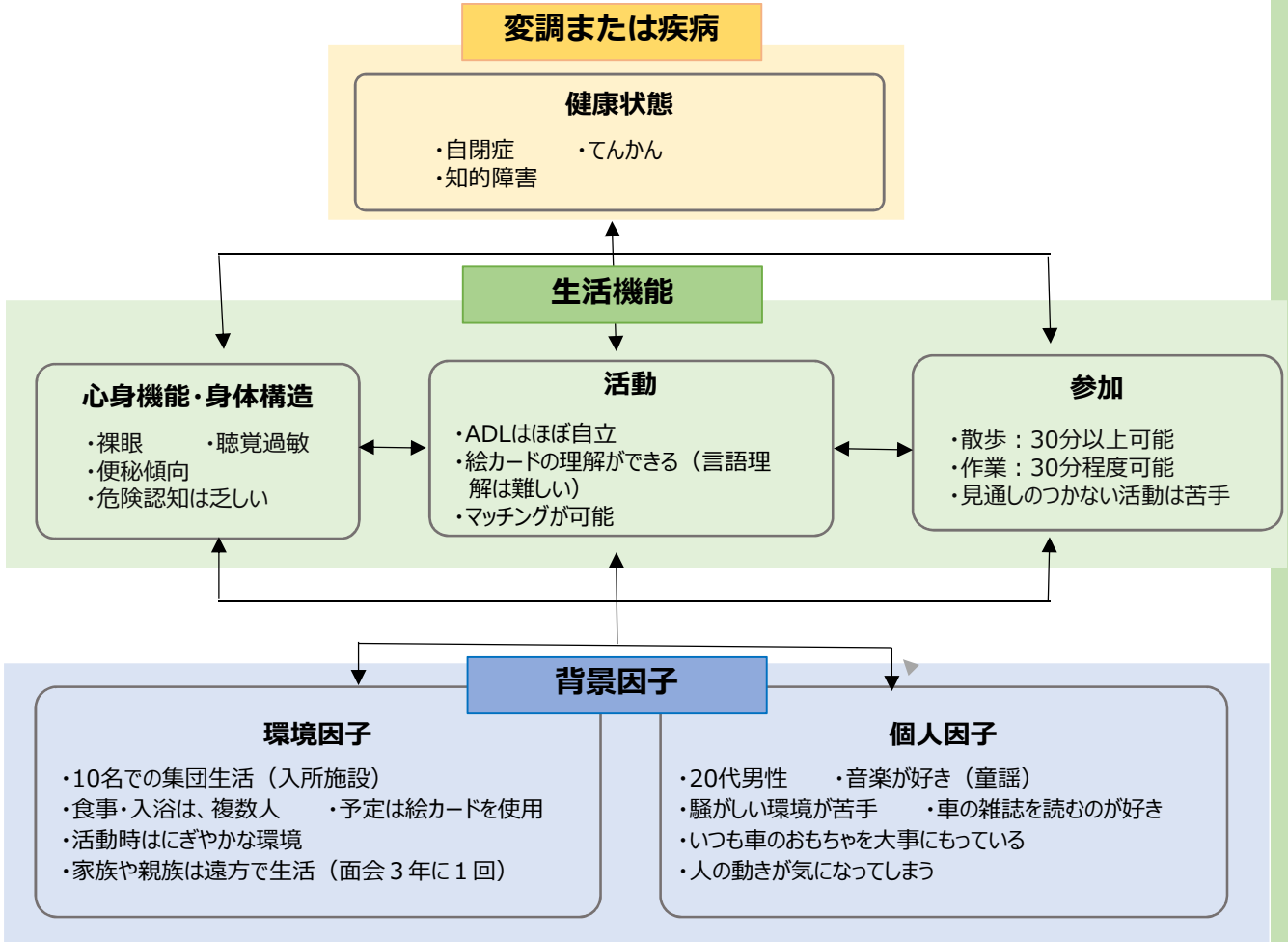
# Step 2　情報整理・分析

- 情報収集
- **情報整理・分析**
- 計画作成
- 計画の共有



# ICFによる情報整理、生活全体の把握

- 障がいを人が「生きる」こと全体の中に位置づけて、「生きることの困難」として理解する新しい見方に立つ
- 生命、生活、人生を包括する「生活機能」というプラス面に注目
- 各要素が相互に影響を与え合う「相互作用モデル」




- **共通言語として多職種間でも活用しやすい**
- **「生活機能」を総合的に把握するための実践的なツール**

【文献】・上田敏（2021）「ICFの理解と活用」きょうされん

# 行動の背景を探る（氷山モデル）

表出している問題

- 他の人を叩いてしまう。
- 日中、自分の部屋で寝てしまう。
- 落ち着かずにウロウロしている。

問題の裏にある理由や要因(仮説)

自閉症の特性から考えられる要因

・社会的な判断の乏しさ

・自分や他人に対する感情の欠如

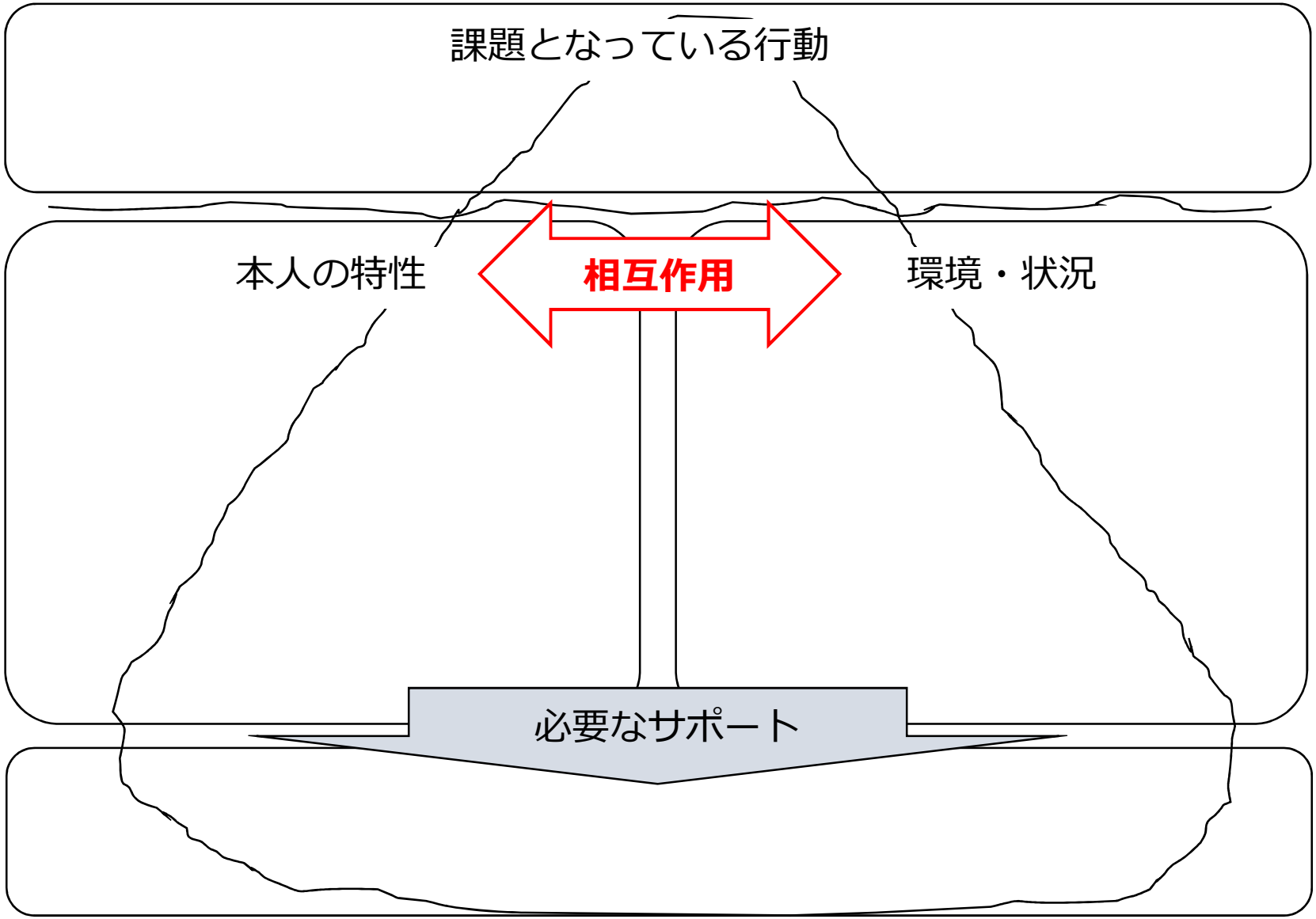
・特異な感覚

・コミュニケーション上の問題

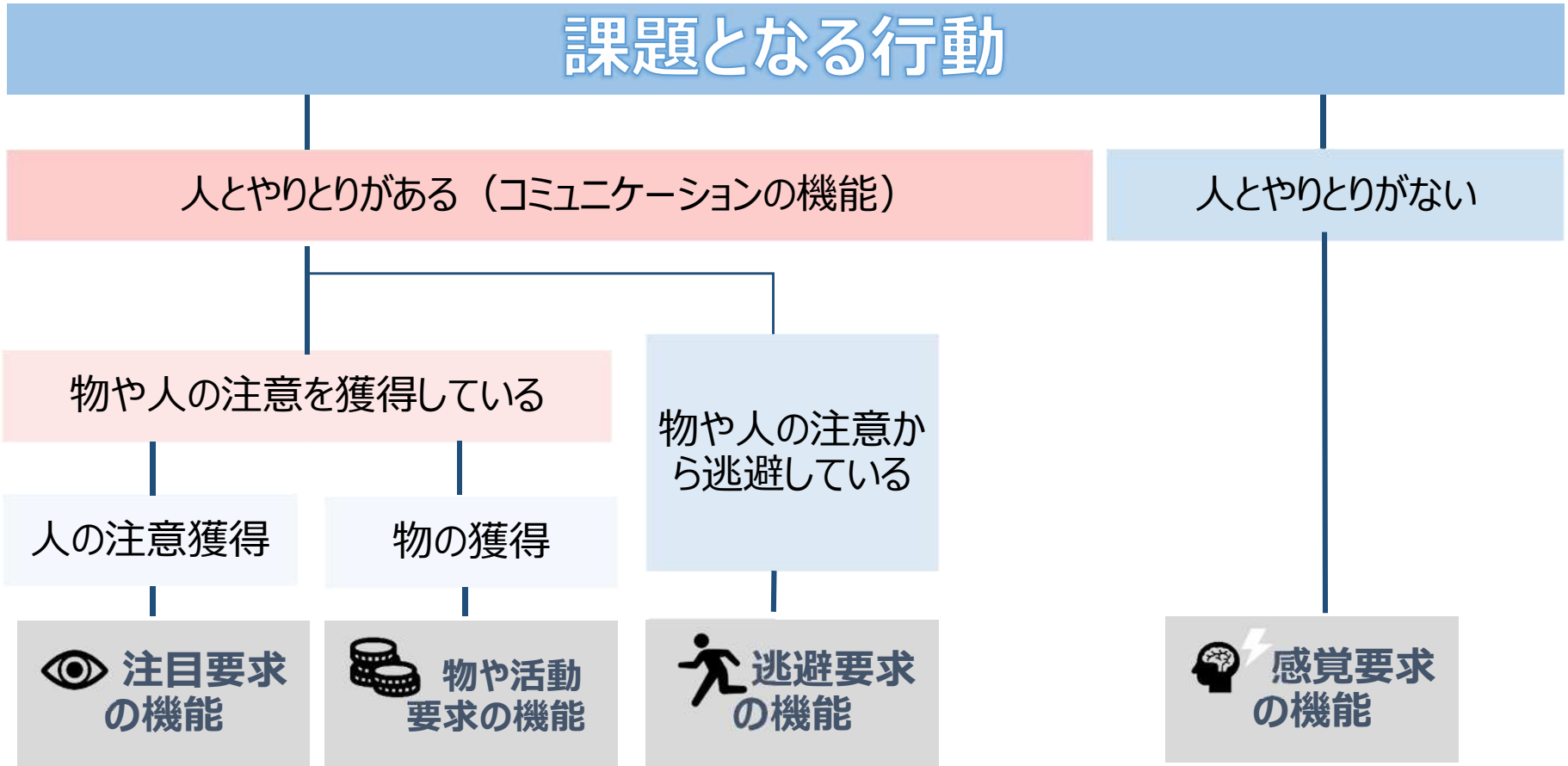
・不適切なかかわり

ショプラーの氷山モデル

# 行動の背景を考え、対応方法を検討するフレームワーク①



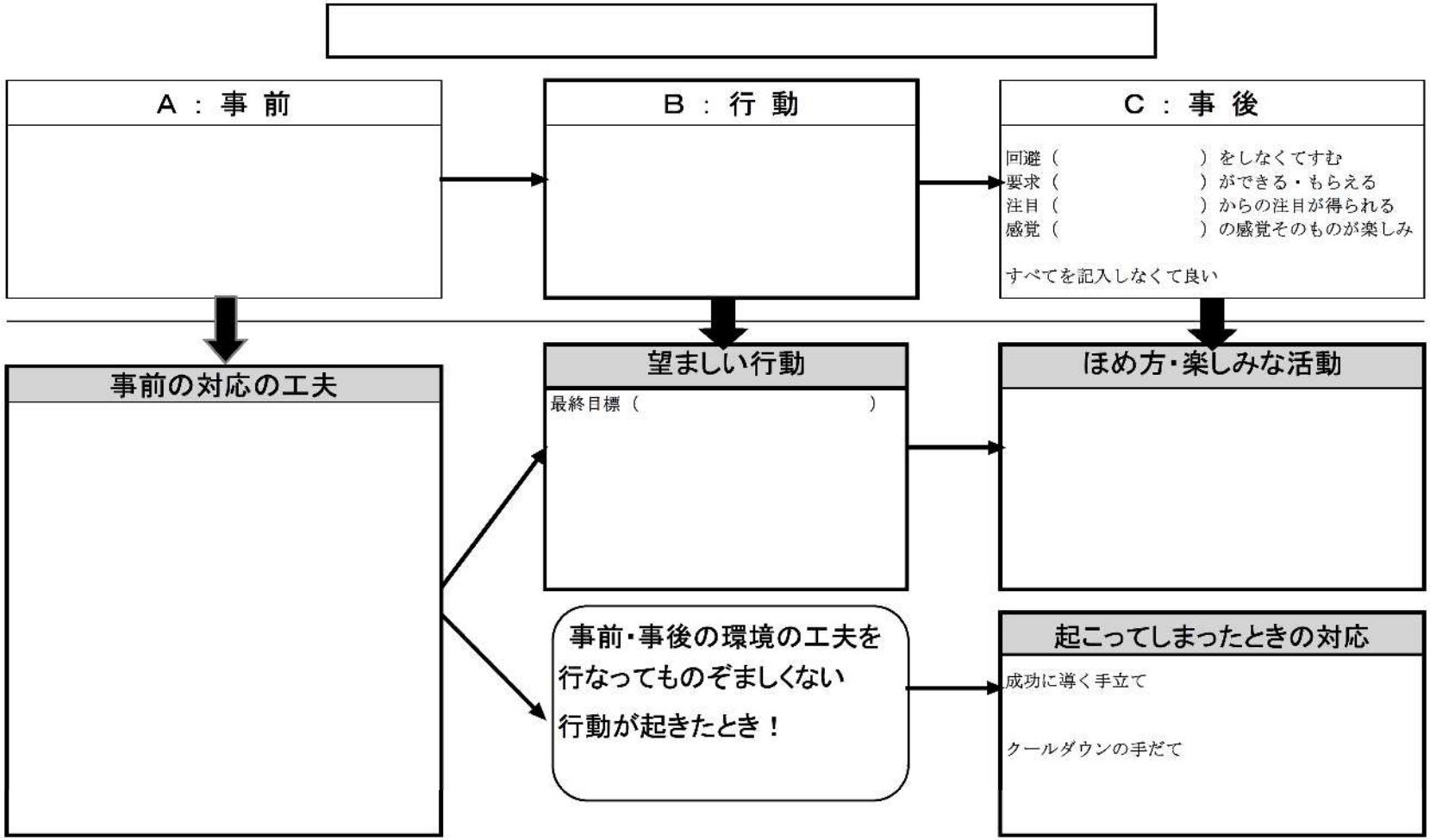
# 行動の背景を探る（機能分析）




※行動機能の分析には、記録が重要

# 行動の背景を考え、対応方法を検討するフレームワーク②

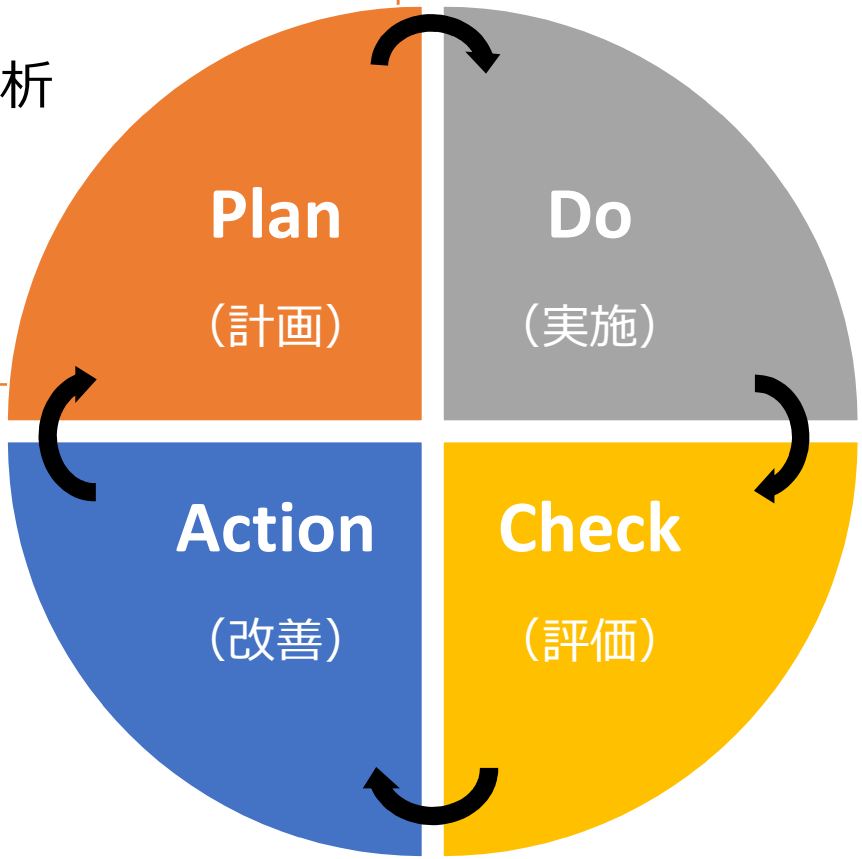
ストラテジーシート ver. 3. 0 【記入日　　年　　月　　日】　　【氏名　　】




© MASAHIKO INOUE

# Step 3　支援計画作成・共有

- 情報収集
- 情報整理・分析
- **計画作成**
- **計画の共有**



# 特性に配慮した支援が必要

【自閉症の特性】

状況の理解の難しさ
適切な段取りを組む難しさ
変化への対応の難しさ
コミュニケーションの難しさ
感覚が敏感または鈍感
など

【伝えたい６つのポイント】

- いつ
- どこで
- 何を
- どのくらい
- どうやって
- 終わったら次は

# 特性に配慮した支援の工夫

- ６つのポイントを伝えるための工夫
  - 時間の工夫
    （生活の見通し）
  - 場所の工夫
    （活動との対応・刺激の整理）
  - 方法の工夫
    （やり方・終わり・次）
  - 見え方の工夫
    （ヒント・着目）
  - やりとりの工夫
    （コミュニケーションツール）

**『構造化』**
ともいいます

# 時間の工夫

- 生活の見通しが持てるよう理解を助ける
- 自分で適切に情報をキャッチし行動できることを大事にする

# 場所の工夫

- この場所で何をするのか理解を助ける
  ➡場所と活動、1対1が理想

- 苦手・不要な刺激を少なくする

# 方法の工夫

- 「何を」「どのくらい」「どうやって」「終わったら次は」という理解を助ける

- 活動の自立度を高め、自信や達成感につなげる

# 見え方の工夫

- 情報を見て分かるように提示する
- 必要な情報に注目しやすくする

# やりとりの工夫

- コミュニケーションを視覚的に示す
- 受信⇔発信の双方向のコミュニケーションを支援する

# わかりやすくする（構造化する）ことで

するべき行動が理解できる

↓

ストレス・混乱が減る

↓

不安を感じなくて済む

↓

問題行動を起こすことが減る

↓

安定した生活が送れる

# 目的はＱＯＬの向上

私たちの生活の中にもたくさんの構造化があります。

構造化は、様々な情報や環境を整理して伝えたり設定したりする方法です。

構造化はあくまで補助具、アイデアです。

構造化の目的は、自立と質の高い生活です。

■構造化があることで私たちの生活は？

→自立的で、豊かな質の高い生活

■構造化がなかったら私たちの生活は？

→自立的でなく、豊かでない生活

# 支援の共有のために形にする

視覚的に示すことで

- 共有しやすくなる
- 検討しやすくなる
- 結果の分析にも有効
- **支援が統一できる**

**理解しやすくなる**

**行動障がいの予防・軽減につながる**

支援手順書/記録用紙

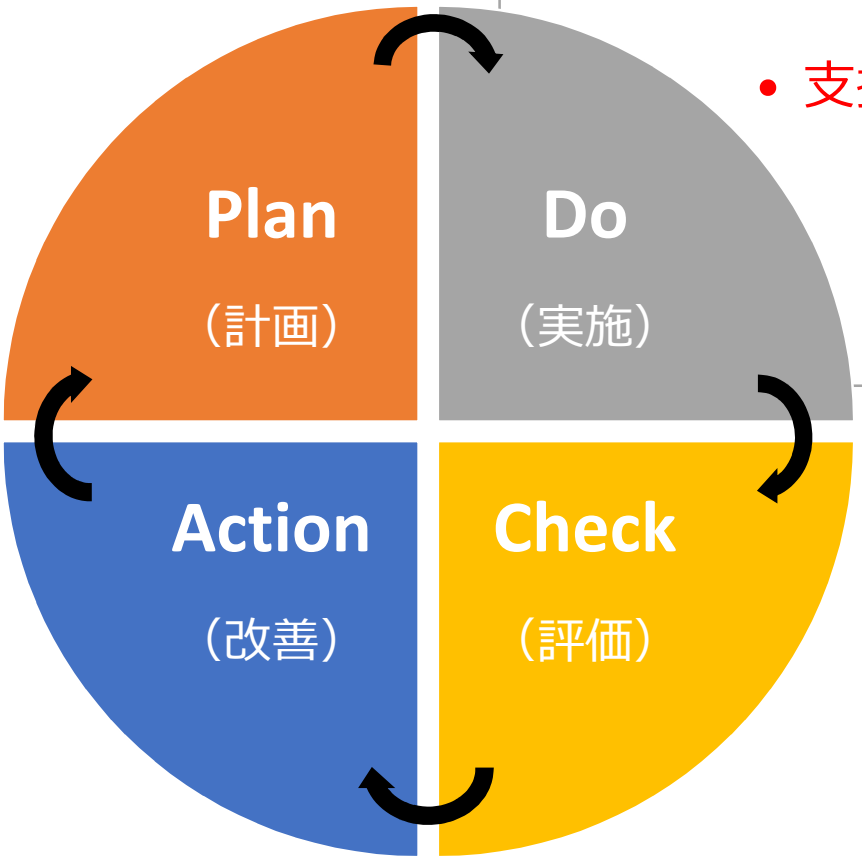
| 日付け | 2000年○月×日 | 氏名 | Tさん | 記入者 | 支援員B |
|---|---|---|---|---|---|

| 工程 | 本人の動き | 支援者の動き・留意点 | 本人の様子（記録） |
|---|---|---|---|
| 事前準備 | | スケジュールに活動カードをセット。<br>お茶をカバンに入れる。 | |
| スケジュール確認 | 出発前に支援者と一緒にスケジュール確認 | Tさんに見えるようにスケジュールを示し、活動カードを1つ1つ指差しして予定を最後まで確認する。<br>最後まで確認できたらカバンを渡して出発するように促す。 | |
| 散歩 | 公園に向かって歩く | Tさんの横を歩き、通行人や車をぶつからない様に注意する。<br>ぶつかりそうな時はTさんの前に出てジェスチャーで止まる様に促す。<br>公園に近づくと走り出すことがあるので、横断歩道の前で本人の前に出て身体の前に手を出すジェスチャーで止まる様に促し、支援者が安全確認する。 | |
| 公園 | 公園の入り口でスケジュール確認<br>ブランコで遊ぶ<br>お茶を飲む | 公園の入り口でスケジュール確認（活動カードを外す）。<br>ブランコに移動、本人が満足するまで遊んでもらう。<br>満足して動き出したら、次のスケジュールを示しベンチに移動。<br>ベンチでスケジュール確認（活動カードを外す）、お茶を飲む。<br>終わったら次の活動を伝える。<br>＊Tさんが水遊びを始めた時は、タイマーを3分にセットし、Tさんに見える様にセットし、「3分でおしまい」と声かけ。<br>タイマーがなったらTさんが水道を止めるので、次の活動を促す。 | |
| 外食 | 飲食店に行き食事をする | お店の前で走り出すことがあるので、本人の前に出てジェスチャーで止まってもらい支援者が安全確認。<br>店の前でスケジュール確認（活動カードを外す）。<br>メニュー表を見せると、食べたいものを指差すので、支援者が注文、購入する。<br>食事は見守りする。<br>食べ終わったら次の予定を伝える。 | |
| 帰宅 | 自宅に戻る | スケジュール確認（活動カードを外す）。<br>家族にTさんの様子を伝える。 | |

＊スケジュール確認の手順
・スケジュールカードを指差し、次の活動を単語で伝える
・活動場所に着くとカードを外しポケットに入れる
・次の活動を伝える際はスケジュールカードを指差し、単語で伝える

＊本人と関わる際の注意点
・声かけは最小限にする（声かけが多くなると混乱しやすいため）
・公園やお店の近くでは目的に向かって急に走り出すことあり
・事前にジェスチャーで止まる様に促し支援者が安全確認する

# Step４　支援の実施・記録




- 支援の実施
- 支援結果の記録

# 支援には記録が大事

- 支援の結果を共有できる
- 利用者像の状態を正しくつかむことができる
- 支援の効果を確認するために有効
- 支援を振り返り、改善するために必要

【記録の例】
- 行動記録
- スキャッタープロット
- ケース記録

など

× 主観的な記録
（例：楽しそうだった）

○ 客観的な記録
（例：笑っていた）

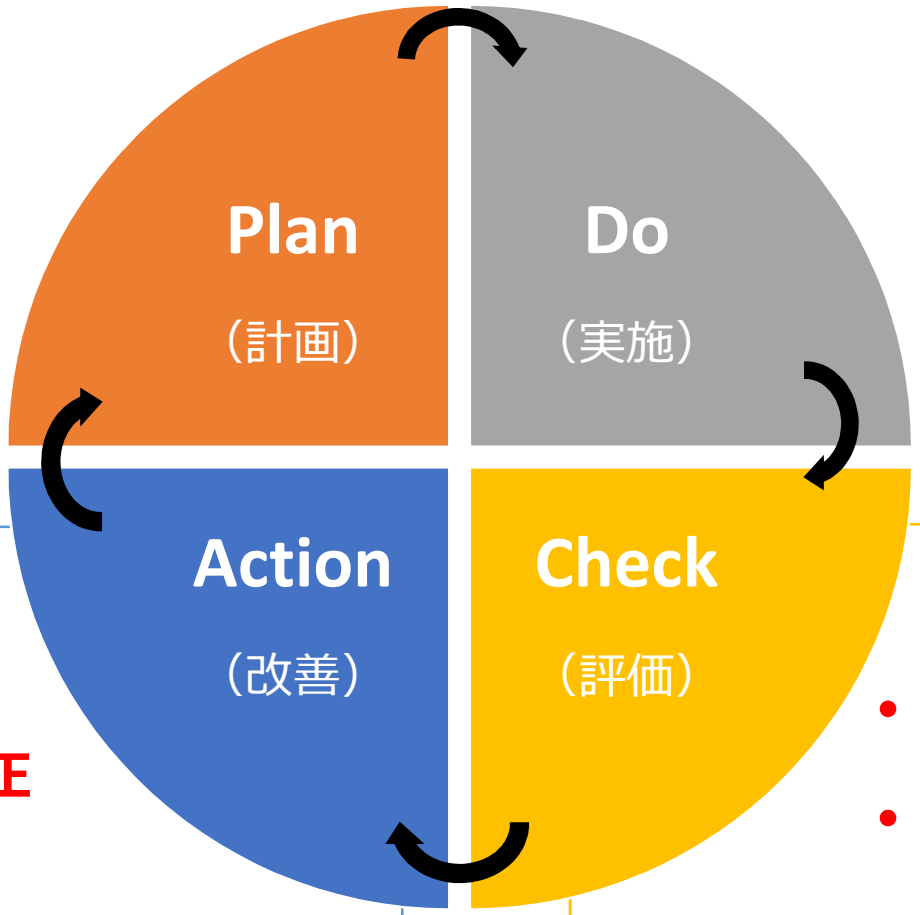
# 情報共有化のpoint｜チームプレイ

- ☑ いつ（支援する時間）
- ☑ 誰が（支援する人）
- ☑ どこで（支援する場所）
- ☑ 何を、どうする（支援内容）
- ☑ いつまで（支援期間と評価日）
- ☑ 記録表（書式、チェックのしやすさ）

構造化された支援環境であることが大前提

構造化は利用者にも職員にも有効

# Step 6　評価・改善

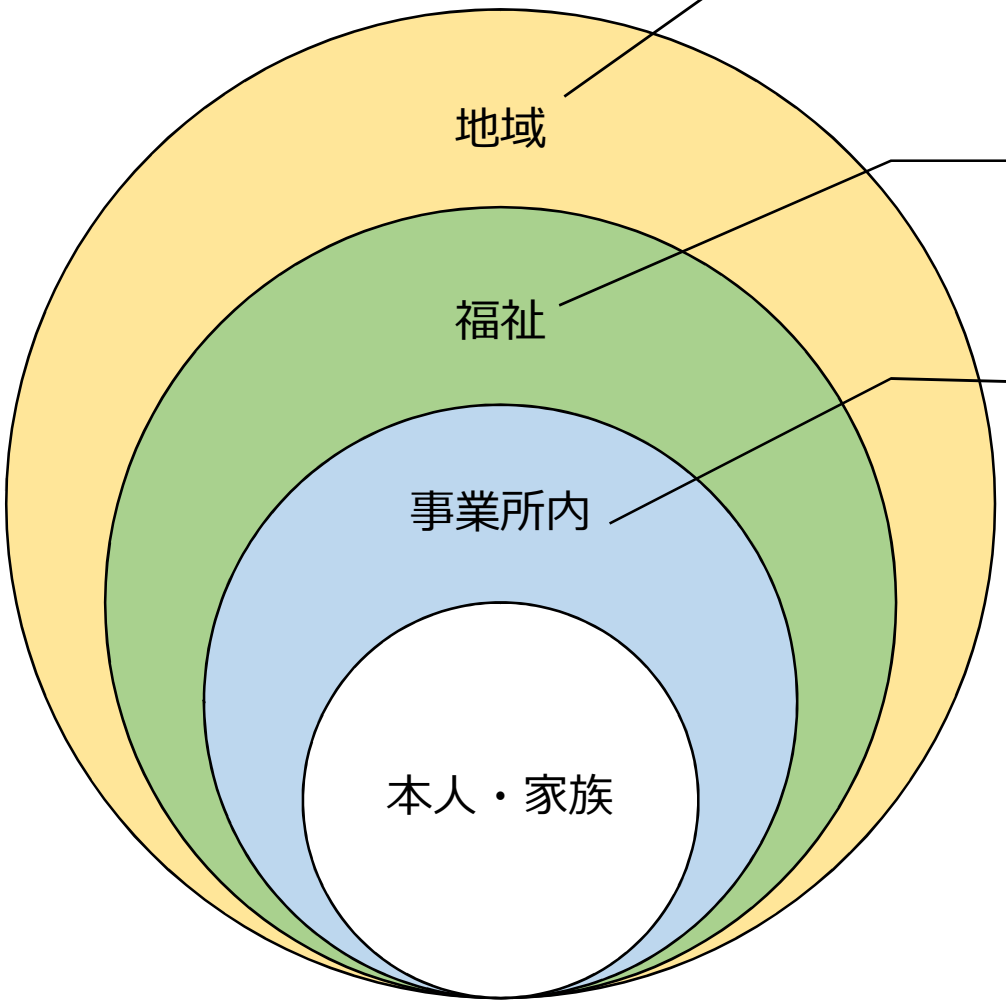



- 改善／修正

- 記録の分析
- 支援の評価

# ４．関係者間の連携

# 地域における関係者




・医療・教育・労働・スーパー
・飲食店・警察　等

・生活介護・行動援護
・グループホーム・相談支援
・放デイ・行政・協議会　等

・支援員・サビ管（児発管）
・施設長・調理員・運転手　等

家族や特定の事業所だけ

で支えている現状もある

# 連携の課題

## 【支援の統一の難しさ】

- 他職員からの協力が得られず、強行研修で学んだことを支援に活かせない
- 日中活動と生活場面の支援の不統一
- 立場やポジションが異なる職員とのチームづくりの困難さ

## 【情報収集・共有の難しさ】

- 時間がとれない
- 分野、事業所によってフォーマットが異なる等必要な情報の収集・共有の困難さ
- 受け入れ時のアセスメントの仕組みが不十分

## 【連携体制構築の難しさ】

- 支援できる人材の不足
- 強度行動障がいがあると受け入れてもらいづらい
- すぐに相談できる相手・機関の不足
- 医療機関との連携体制の不十分さ（自閉症・強度行動障がいに詳しい医師が不足）

【文献】
・国立のぞみの園（2019）：「強度行動障害支援者養成研修の効果的な 研修カリキュラム及び運営マニュアルの作成に関する研究」『平成30年度障害者総合福祉推進事業』
・PwCコンサルティング（2022）：「強度行動障害児者の実態把握等に関する調査研究」『令和3年度障害者総合福祉推進事業』
・全日本自閉症支援者協会（2022）：「強度行動障害者支援に関する中核的な人材の養成に関する研究」『令和3年度障害者総合福祉推進事業』

# 連携して支援する必要性

それぞれの場面やライフステージにおける関係者が、

本人を支えるチームのメンバーとして、

本人の特性や配慮すべきことについて共通の認識を持ち、

同じ方針に沿った統一した支援をしていくことが大切。

支援の統一がされていない＝バラバラな支援

➡本人が理解しづらく、混乱してしまう

# 統一した支援をするために

■ 日頃からお互いに頻繁な情報共有・連携が欠かせない

- 共有する情報の視点は「体調」「生活リズム」「環境の変化」「問題行動の状況」等

■ 個別の支援会議（ケース会議）を開催する

- 関係機関で情報を持ち寄り、現状確認や役割分担を行う
- サービス等利用計画、個別支援計画、支援手順書、個別の教育支援計画、個別の指導計画等の積極的な共有も

情報共有・支援会議開催にあたって、ICTの活用が有効

# 強度行動障害支援者養成研修

- 平成25年から、国立のぞみの園がテキスト作成と指導者研修を開始、
- 平成27年には、研修修了者の現場配置と（事業所への）報酬をリンクさせ、
- 令和元年には、受講対象者のイメージを支援現場の0年0か月職員とした。

- **研修の目標**

| | |
|---|---|
| **基礎** | チームの一員として動くために、自閉症の障がい特性を理解する、一貫性のある支援を行うための支援手順書を読むことができること |
| **実践** | 自閉症の特性に沿った内容を支援手順書に反映することができること |

- 受講者数は、全国で、基礎：約８万人、実践：約４万人

（※状況には地域格差あり）

# 情報収集・共有に関する研究

■ 強度行動障害支援者養成研修により、構造化や視覚的支援、記録等の標準的支援の普及が行われている

■ 一方、課題として下記のようなことが指摘されている

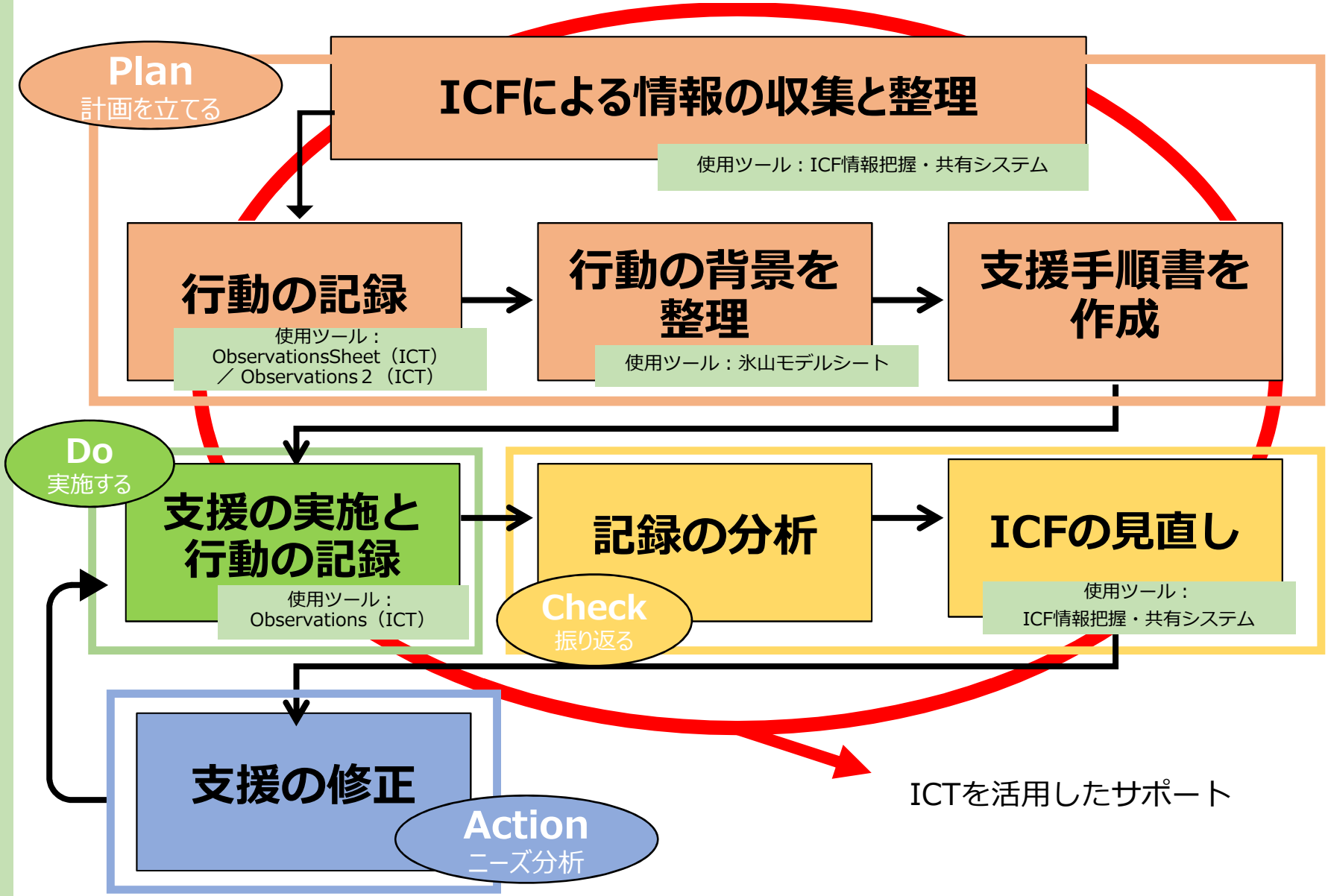
【課題１】
目に見えにくい障がい特性や本人の強み環境要因等の把握および支援計画等への反映を難しいと感じる支援者が多い

【課題２】
記録の収集や分野を超えた関係者間の情報共有に関して標準的な方法がない

【課題３】
記録に関して記入や分析とも労力が大きく、時間が十分にとれていない現状がある

【文献】
・全日本自閉症支援者協会（2020）：「強度行動障害児者に携わる者に対する体系的な支援スキルの向上及びスーパーバイズ等に関する研究 」令和元年度障害者総合福祉推進事業
・国立のぞみの園（2019）：「強度行動障害者の研修カリキュラム及び運営マニュアルの作成に関する研究」平成30年度障害者総合福祉推進事業

# 支援パッケージ


Plan
計画を立てる
ICFによる情報の収集と整理
使用ツール：ICF情報把握・共有システム
行動の記録
使用ツール：
ObservationsSheet（ICT）
／ Observations 2 （ICT）
行動の背景を整理
使用ツール：氷山モデルシート
支援手順書を作成
Do
実施する
支援の実施と行動の記録
使用ツール：
Observations（ICT）
記録の分析
Check
振り返る
ICFの見直し
使用ツール：
ICF情報把握・共有システム
支援の修正
Action
ニーズ分析
ICTを活用したサポート

# 例えば・・・

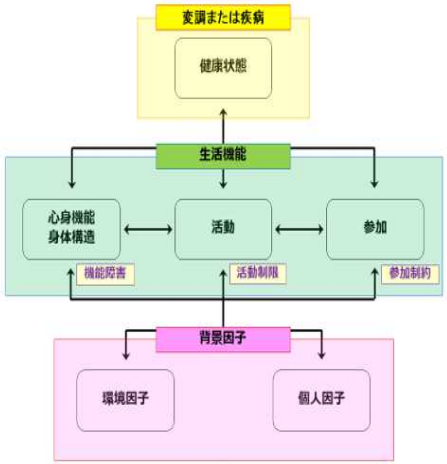
利用者Aさん

●重度的障がい・自閉症
●生活介護とGHを利用
【行動】
散歩の時に大声をだす
物を叩く
急に怒る　などなど

支援に悩む
支援者Bさん

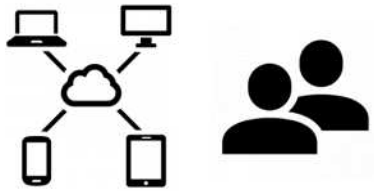
●Aさんの障害特性、強みは？どうやって支援に活かせば・・・
●問題行動をなんとかしなければ！
●相談するにはどんな情報が必要なのか？等

ICF




**状況の整理と情報の引き継ぎ**

- ICFの表を埋めてみることで「人が多く、騒がしいのが苦手」（個人因子）、「細かな作業が好き」（個人因子）、「散歩は5分で切り上げてしまう」（活動）、「便秘気味」（健康状態）、という情報の組み合わせが見えてきた。そこで、体調が悪いときに大勢で散歩にいくことで「大声を出す」のではと考えることができた。
- 「体調が悪いときは自室で本人の好きな作業をする」（活動）、「散歩は少人数で短時間」（環境調整）という支援をしたところ、大声をだすことはなくなった。
- GHの職員にもICFの図を共有して説明したことで、皆で支援を考え、統一でき、GHでも大声をだすことはなくなった。



ICTを活用した記録、情報共有

**すぐに伝えられる**

- 支援に困ったときにはICTを活用してデータ共有し、すぐに助言をもらうことができた。助言をもとに支援を改善することができた。

利用者Aさん

生活の質があがった！

支援の幅が広がった！
皆で考えられて助かった！

支援者Bさん

# ICTの活用による情報共有

・chatwork
・Slack
・LINEWORKS　等
チャットツール（ICT）
の活用

相談

助言

・グループ（チーム）内で課題を共有し、全体で考えることができる
・気軽にやり取りができる　等

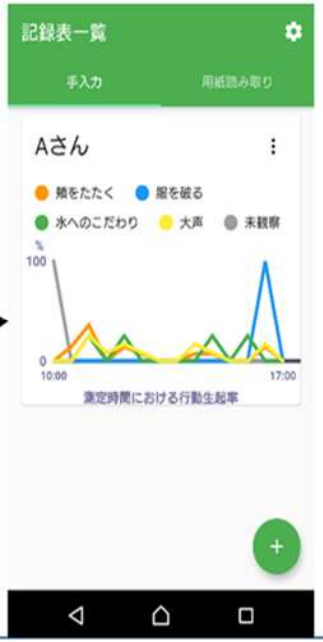
・業務効率化
・コミュニケーションの活発化
・効果的な情報共有が可能　　等

# 業務負担軽減

- ICTの活用により記録および記録の加工の簡素化が期待できる

Observations2
（行動の生起頻度の記録）

記録後
すぐに
グラフ化




Observations
Sheet
(行動の状況を記録)

行動記録
がスマホで
記入可能

# 孤立させないこと

- 強度行動障がいへの支援は一支援者、一事業所だけではできない
- 皆で考え、支え合っていく体制づくりが求められている

# フォローアップの必要性

**フォローアップ研修**の必要性を感じている都道府県が多い。

具体的には、疲弊している職員や不安を感じてる職員がいることから、**コンサルテーション**や**スーパービジョン**の必要性を感じているほか、**研修内容の活用状況の確認、困難事例・成功事例の情報交換**をする場が必要と感じられている。

【文献】
国立のぞみの園（2019）：「強度行動障害支援者養成研修の効果的な 研修カリキュラム及び運営マニュアルの作成に関する研究」『平成30年度障害者総合福祉推進事業』

# （事例）東京都強度行動障害支援アドバンス研修

## 【目的】

・平成25年度より強度行動障害支援者養成研修（基礎研修）が開始。
　→まずは、国研修で提示されたスタンダードを基準にして、方法は別として
　　このスタンダードが現場に定着する状況を目指した。
・一貫した対応をできるチーム作り、地域で継続的に生活できる体制づくりなど

## 【研修内容】

・鳥取大学の井上雅彦教授による講義・事例検討会（全５回）・実践報告会
・ABAを活用した支援アプローチを事業所の事例を対象に実施
・参加者は、各グループ演習にてストラテジーシートに基づいて介入計画を立て、
　研修期間で実践を行う
・参加者は対象者の行動記録を毎回提出し、フィードバックを受ける（SNSを活用）
・グループリーダーは会員施設より選出

## 【研修の効果】

・事業所間の繋がりが深まったり、相談・見学等が増えた
・研修修了者の実践力、現場マネジメント力、ICT活用力等が向上
・研修終了後は、研修のサポート、強行研修のファシリテーター・講師にステップアップし
　ていく等人材育成の面も

【文献】
竹矢恒（2021）国立のぞみの園・強度行動障害者支援に関する効果的な情報収集と関係者による情報共有、支援効果の評価方法の開発のための研究
実践検討・意見交換会資料「東京都強度行動障害支援アドバンス研修について」より　一部改変

【文献】

全日本自閉症支援者協会（2021）「強度行動障害支援者養成研修を現場で生かすために　パンフレット」http://zenjisyakyo.com/data/202104chirashi.pdf

# チームづくりに必要なこと

強度行動障がいの状態にある人に対する質の高い支援を提供するチームづくりには、推進する人材が不可欠

【事業所内】

PDCAサイクルを繰り返しながら、支援現場のOJTを推進するリーダー

【地域単位】

自治体担当者、有識者、関連団体役員、直接支援事業所管理者・職員、相談支援専門員　等

【文献】
・全日本自閉症支援者協会（2022）：「強度行動障害者支援に関する中核的な人材の養成に関する研究」『令和3年度障害者総合福祉推進事業』

# 地域における強度行動障がい支援の充実を目指して
# ～関係機関の連携と「強度行動障害医療研究会」

## 福祉

2013年～「強度行動障害支援者養成研修」開始

研修の広がりと

コンサルテーション体制の充実

**家庭**
（保護者・親の会）

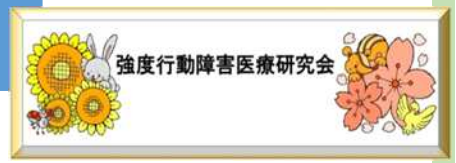
## 医療

各地域や分野での個々の動き

2019年～メーリングリスト
学会シンポジウムなど

2020年10月～

「強度行動障害医療研究会」




現在41都道府県の医師・福祉・心理・教育関係者などML約200名・会員140名

入院中でも可能な
・行動援護
・重度訪問介護
の利用促進は？

**教育**
学齢での予防
多機関連携

**課題**

実際の事例でのフォローアップ研修・地域での多機関連携

研修・治療プログラム・ガイドラインの整備・多機関連携

・診療報酬
・拠点医療機関やセンター配置は？

【文献】會田（2022）：「強度行動障害支援者養成研修資料」

# 教育との連携　有識者会議　報告（一部抜粋）

強度行動障害と判定される児童生徒の支援については、障害の特性に応じた専門性や経験が必要であることも踏まえ、**強度行動障害のある児童生徒に対して適切に対応することができるよう、教育と福祉が連携して、**（略）強度行動障害支援者養成研修等の専門的な研修を、特別支援学校の教師等が障害福祉サービス事業所職員とともに受講する機会を設けたりすることが期待される。

【文献】
「新しい時代の特別支援教育の在り方に関する有識者会議　報告（令和３年１月）」p.27

# 5．おわりに

強度行動障がいの状態になっている人は、
「困った人（子）」ではなく、**「困っている人（子）」**

**【支援の目的】**
**■強度行動障がいの予防・軽減**
**■社会参加の促進**
**■その人（子）の豊かな暮らしため**

【文献】全国地域生活支援ネットワーク（2020）「強度行動障害のある人の暮らしを支える」p27